

Development of art subject materials that utilize
regionality and traditional culture : Teaching
materials that relate expression and appreciation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田丸, 光恵, 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027934

地域性や伝統文化を生かした美術科の題材開発

—表現と鑑賞を相互に関連させた題材構想—

田丸 光恵 高橋 智子

静岡大学教育学部附属島田中学校 静岡大学教育学部美術教育系列

Development of art subject materials that utilize regionality and traditional culture : Teaching materials that relate expression and appreciation

Mitsue TAMARU Tomoko TAKAHASHI

要旨

静岡大学教育学部附属島田中学校の美術科（以下、本校と記す）では、2018年度より教科テーマを「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」とし、実践研究に取り組んでいる。本研究では、「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに着目している。本論では、2018年度に実施した実践の成果と課題をもとに構想した2019年度の実践報告を行う（研究2年目）。地域性や伝統文化を生かした題材の実践内容を報告すると共に、その成果と課題について考察を行い、「つながり」を意識した題材開発や授業づくりの可能性を引き続き模索する。

キーワード： 美術科 地域 伝統文化 日本の美 題材開発

1. はじめに

2021年度からの中学校の新学習指導要領全面实施に伴い、美術科では、地域の身近なものや伝統的なものを生かした題材開発や指導の充実が指摘されており、地域の伝統的な工芸や民芸などに使用されている材料や表現技法、それに関わる人材の活用について美術の学習を深めるために重要であることが示されている¹。本校においても、これまで地域の作家や学芸員（美術館など）と連携を行い、伝統的な工芸などを取り上げ、積極的に題材開発や授業研究に取り組んできた²³⁴。地域の「ひと・もの・こと」とのつながりを授業に生かしていくことは重要な視点であると考え。近年、日本各地で地域性を生かした題材開発や実践が報告されている。

本校では、2018年度より教科テーマを「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」とし、実践研究に取り組んでいる。本テーマには、表現と鑑賞を相互関連させた学習過程を通して、感性や想像力を働かせて様々なことを感じ取ること、新しい見方や考え方に出会い新たな価値を見出すこと、表現したり鑑賞したりする喜びにつなげていくことを大切にしたいという思いを込めている。教科テーマに迫るために、その方法として「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに着目している。特に「地域のひと・もの・こととのつながり」、「小学校・中学校での題材のつながり」、「中学3年間の学びのつながり」、

「題材内での学びのつながり」を重視している。生徒につけたい力を計画的・段階的に明確にすると共に、この4つの「つながり」を意識し、題材や授業を構想している。

2. 2018年度の実践の成果と課題

前報⁴では、2018年度に実施した「地域のひと・もの・こととのつながり」や「中学3年間の学びのつながり」を意識した題材提案を行い、その成果と課題を報告した。研究の評価方法として、2名の生徒（当時1年生：生徒A及び生徒B）を抽出し、実践前後の学びの分析を行うと共に、題材を実施した学年の全生徒を対象としたアンケートを実施し、その分析を行った。

生徒A及び生徒Bは、美術に対して苦手意識を感じており、「表現したい」という思いはあるもののアイデアを生み出したり、表現を積極的に追究したりすることに課題があるという実態であった。これは、同学年の生徒の傾向とも重なるものであった。こうした実態から、中学校1年生で実施する各題材では「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の視点を重視し、その過程で前述した2つのつながりを意図的に組み込むように題材を設定した。「つながり」を意識した題材の過程で、生徒は自分の思い（主題）をもとに発想することや構想することに繰り返し取り組んだ。

2018年度の成果は、以下の2点である。まず、

「地域のひと・もの・こととのつながり」を意識することで、生徒の自身の制作への意欲や主題を生みきっかけになったということである。次に、「中学3年間の学びのつながり」（目標や方法など）を意識することで、生徒が主題を明確に持ち、表現のねらいや内容を踏まえ、制作に臨んでいる姿が多く見られるようになったということである。

課題としては、継続して生徒の主題を生み出す力の育成（思考力、判断力、表現力等の育成）があげられる。生徒のアイデアや発想が広がっていくためには、まず個々の思いを引き出し、表現したいという意欲を向上させたりする必要がある。生徒の実態は様々であり、個々に違いがあるため、個々の思いを引き出し、個に合わせた指導支援が重要になるだろう。

また、以前よりも主題を生み出すことや発想し構想を練ることができるようになったが、それと同時に表現する際の知識や技能の習得も課題としてあげられた。発想や構想する力と知識や技能の力は切り離されるものではなく、その指導のバランスが必要である。詰めこむだけの知識や技能ではなく、表現に豊かに生かせる知識や技能の学び方をさらに追究する必要がある。表現における知識や技能面での力の育成においても、「つながり」をより生かした授業づくりの工夫が今後一層求められる。

最後に、表現の過程において、自分が試行錯誤し新たに創造したものやことを自身で認められるようになることがあげられる。それには、教員の指導支援の方法が課題となる。

3. 研究目的

本論では、2018年度の実践の成果と課題をもとに構想した2019年度の実践報告を行う（研究2年目）。地域性や伝統文化を生かした題材（以下、本題材と記す）の実践内容を報告すると共に、その成果と課題について考察を行い、「つながり」を意識した題材開発や授業づくりの可能性を引き続き模索する。

4. 実践の概要

(1) 対象

本実践の対象は、本校の2年生である。昨年度中学1年生から進級した2年生を対象とした⁵⁾。

(2) 題材名

「樹花鳥獣の世界～扇子に新たな対を求めて～」

(3) 本題材で育成を目指す資質・能力

前述したが、教科テーマは「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」である。本題材で育成を目指す資質・能力を図1と表1に示した。教科テーマを達成するために、図画工作科で培っ

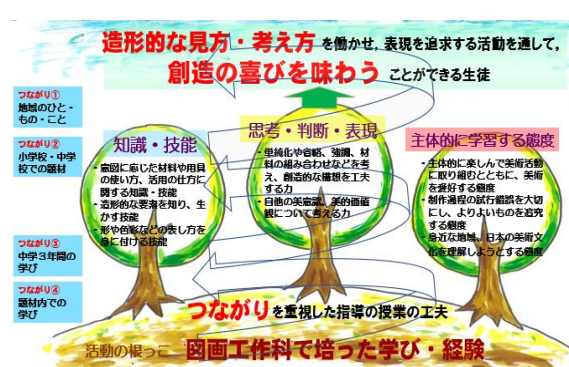


図1 本題材で育成を目指す資質・能力

表1 美術科で育成を目指す力と題材目標の関連

美術科で育成を目指す力	題材目標
<ul style="list-style-type: none"> 形や色彩などの造形要素に関する知識 材料や用具の特性に応じた制作手順や完成の見通しの立て方に関する知識・技能 	<p>（知識・技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> 紙本来の色を生かした余白の美を取り入れ、その色を生かしたり、主題に合う色をつかったりしながら、彩色方法を工夫しようとしている。 制作手順や完成の見通しをもち、絵柄の形や色に思いを込めて表現しようとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 豊かに発想し、構想する力 独創的、総合的に考え表現する力 意図に応じて表現方法を創意工夫する力 自他の美意識、美的価値観について考える力 	<p>（思考・判断・表現）</p> <ul style="list-style-type: none"> 扇の曲面を生かし、樹花鳥獣をモチーフにした形を単純化や強調化したり、みためたりして練ろうとしている。 主題を基に、対のモチーフをデザイン化し、色や形、画面全体との調和を図りながら工夫を凝らした画面構成をしようとしている。 扇子の歴史や、どのように人々に親しまれてきたのかを考えたりする活動を通して、いにしえの人々の生活の中で創意工夫を重ねて引き継がれてきた工芸美術品を感じ取ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 制作過程の試行錯誤を大切に、よりよいものを追究しようとする態度 主体的に楽しんで美術活動に取り組むとともに、美術を愛好する態度 身近な地域、日本および諸外国の美術文化を理解しようとする態度 	<p>（主体的に学習に取り組む態度）</p> <ul style="list-style-type: none"> 曲面に描かれた作品に興味をもち、鑑賞したことを生かしたり、よりよいものを制作したりしようと試行錯誤しながら取り組もうとしている。 色や形、画面全体との調和を図りながら、進んで表現の主題や対になるモチーフ、デザインを生み出し、主体的に取り組もうとしている。

てきた学びや経験を基礎として、学習指導要領に基づき、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点を中心としている。昨年の課題としてあげられた「知識・技能」では、形や色彩などの造形要素に関する知識、材料や用具の特性に応じた制作手順や完成の見通しの立て方に関する知識・技能の向上を目指している。昨年同様に重点目標である「思考・判断・表現」では、豊かに発想し、構想する力や、独創的、総合的に考え表現する力、意図に応じて表現方法を創意工夫する力、自他の美意識、美的価値観について考える力の育成を目指している。

「主体的に学習に取り組む態度」では、制作過程の試行錯誤を大切に、よりよいものを追究しようとする態度や、主体的に楽しんで美術活動に取り組むとともに、美術を愛好する態度、身近な地域、日本及び諸外国の美術文化を理解しようとする態度の育成を目指している。

3年間を通して、上記で示した力を「つながり」を重視した授業を通して育み、最終的には「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」を目指した。図1には、本校で生徒に育成する3つの観点と本題材で育成を目指す資質・能力を関連づ

けて示している。

(4) 研究方法

本題材ではねらいに迫るために、本年度も継続して「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに取り組んだ。本研究では4つの「つながり」を重視しているが、本題材では「地域のひと・もの・こととのつながり」「題材内での学びのつながり」と「中学3年間の学びのつながり」の3つの「つながり」の視点を意図的に組み込んだ。これらを含める4つの「つながり」の視点は、年間を通して、各題材内に組み込んでいる。以下には、本題材で意識した3つの視点について説明を行う。

①地域のひと・もの・こととのつながり

本題材では昨年度から引き続き「地域のひと・もの・こととのつながり」を意図的に題材内に設定した。具体的には、鑑賞活動において、生徒にとって身近な美術作品を取り上げた⁶。本題材では、身近な作品を鑑賞作品として取り上げることで、生徒の作品への思いが深まり、活動の幅が広がるのではないかと考えた。前年度の実践からも、地域の作家や学芸員、職人との関わりが、生徒たちの学ぶ意欲を向上させたり、主題を明確に持ったりする手立てとして有効であった。また、こうした成果の背景には、教員自身の題材研究の重要性や美術館や作家との打ち合わせの重要性が前年度の実践から示されている。地域の美術館や作家の作品を取り上げることは、題材研究や指導の充実につながる。実際、本題材においても、教員が当該美術館に足を運び、作品や作家の研究に取り組んだ。まずは、教員が身近な地域にあるひと・もの・ことの魅力を理解し、それらを題材化する意義を明確に持つことが重要である。さらに、地域のひと・もの・こととのつながりを重視した本題材での学びが、学外の鑑賞活動につながることも期待した。本題材を通して、生徒が地域にある美術作品などの良さや魅力に目を向け、主体的に表現や鑑賞に取り組もうとする資質・能力を育成することを目指した。

②中学3年間の学びのつながり

本実践の対象である2年生の年次指導計画を表2に示した。対象生徒の実態については、前述したが、そうした実態に合わせて、指導計画を検討している。1年次では、まず生徒自身が思いをもち、豊かに発想・構想し、美術に対する見方や感じ方を深めるようになってほしいと考えた。そのため、年間を通して、生徒が表現において自ら主題を生み出し制作に取り組む活動を充実させているのが特徴である。2年次では、1年次から継続して主題を生み出し制作することを重視しつつ、知識・技能面での資質・能力の育成を計画

的に構想した。対象生徒は1年次での「モチーフのデザイン化や抽象化」が難しく、表現したいという思いはあるものの表現における知識・技能面での資質・能力の育成、豊かな学びの追究に課題があった。表2の色分けについては、ピンク色と水色は「表現領域の題材」を示している。具体的には、ピンク色は「主題を生み出すこと」を重視した題材であり、水色は「主題を生み出すこと」と「主題を他者に伝えること」を重視した題材となっている。また、黄色は「鑑賞領域の題材」を示している。教科テーマの実現を目指し、表現及び鑑賞の両題材を相互に関連させながら年次指導計画を構想している。

③題材内での学びのつながり

本研究では、題材内での学びのつながりを意識している。年次指導計画においても表現と鑑賞の関連性を重視しているが、題材内でも表現と鑑賞を相互に関連づけながら、資質・能力の育成を目指している。本題材では、「鑑賞→表現→鑑賞」という活動の流れになっている。導入の鑑賞では、①で述べたように、地域の美術館や作家の作品を活用するようにした。こうした鑑賞を通して、日本の美の造形的な特徴を捉えることを理解し、その学びが表現で発揮される授業構想となっている。その後の表現活動において、「思考・判断・表現」では表現の意図と創造的な工夫などについて考えつつ構成を工夫し心豊かに表現すること、「主体的に学習に取り組む態度」では主体的に表現や鑑賞に取り組もうとすることを期待した。

題材名は「樹花鳥獣の世界～扇子に新たな対を求めて～」(全13時間)である。「樹花鳥獣」をテーマに、「対」の扇面を制作する内容となっている。導入の鑑賞活動には、「地域のひと・もの・こととのつながり」を生かし、MOA美術館に所蔵されている《紅

表2 2018年度入学生 1・2年次の年次指導計画

1年(45時間)		2年(45時間)	
1	オリエンテーション・ゆるキャラ	1	線をつないで～季節の色や線であそぼう
2	鉛筆の使い方	2	点描で描こう～身近な人～
2	ポスターカラーの使い方	1	生活とつなぐ 学校生活に必要な？ピクトグラム
4	レタリング&絵文字に挑戦!	5	校内に必要なピクトグラムを 考えよう
1	日本の美 ～嵐神楽神楽回屏風を読み解く～	1	校内にピクトグラムを貼ろう
1	日本の美～海野光弘の版画～	5	夏野菜の連続模様～漬こみハンコで 夏を染しむうちわをつくらう～
10	見ること・彫ること・刷ることへの挑戦 ～～版多色刷り版画～	8	未来の自分に送るメッセージ ～モダンテックニック～
1	版画鑑賞会	1	日本の美～紅白梅回屏風～
2	和風の世界	1	静岡の美～芹沢銈介の魅力～
18	伝統をつなぐ(扇) 天まで届け!ばく・わたしの夢	10	樹花鳥獣の世界 ～扇子に新たな対を求めて～
1	和風鑑賞	1	対の美鑑賞会
7	透視図を用いたデザイン	3	空・宙を描こう ～「天気の子」から学ぶ～
		5	季節を感じる 和菓子のデザイン ～発見・発信 地域の魅力～
		1	和菓子 鑑賞会

* 2年次の3学期、新型コロナウイルス感染症拡大予防のために休校となり、実施できない題材があった。

白梅図屏風》と静岡出身の芹沢銈介の作品を鑑賞した。続く表現活動では、扇子の制作に取り組んだ。扇子の制作は、ポスターカラーによる着彩である。さらに、片面だけではなく両面（対）の制作に取り組んだ。その後、自分達の作品鑑賞の時間を設けた。導入の鑑賞では、表現につながる造形的な要素（特徴的な日本の美、余白の美、切り捨ての美など）の視点を重視した。表現では鑑賞でつけた力を発揮するように設定した。主題をもとに「対」を意識した自分なりの作品テーマを発想・構想したり、制作時にはモチーフの形や色を単純化・省略化・簡略化できるよう指導したりした。「対」をテーマに表現に取り組むことは、日本美術に見られる「対」の面白さなどを学ぶことができると考えた。具体的な内容については、後述する。

（５）生徒の実態把握（事前アンケート）

本題材前には、「夏野菜の連続模様～消しゴムハンコで夏を楽しむうちわをつくろう～」（全5時間：表2）を実施した。この題材では、1年次から取り組んでいる「つながり」を意識した授業構想（題材開発及び研究など）を通して、主題を考え、どのような団扇にしたいのか思いを膨らめることができる生徒が増えてきた（図2）。一方で、制作過程において制作に意欲的ではあるが、主題を色や形などで表現する過程でつまづきを感じ、知識や技能の面で課題を抱えている生徒が多かった。

前題材までの生徒の学びの実態や本題材に対する生徒の実態を教員が把握することは非常に重要である。生徒の実態把握のために、本題材前に事前アンケートを実施した。アンケートの内容は、扇子に関する関心、思考・判断・表現に関する生徒の実態についての項目となっている。本稿では、その一部を報告する⁷。まず、生徒にとって扇子が身近であるかどうか把握するために扇子の所有状況について聞いたところ（図3）、13%（15人）の生徒が扇子を所有していなかったが、37%の生徒が自分で所有（42人）しており、50%の生徒は家族が所有している（57人）結果となった。扇子の使用用途としては、夏の暑い時期に使用するという回答が多く、中には習い事で使用したことがある生徒や、扇子をつくったことがある生徒も数人いた。「扇子は身近ですか」という問いに対しては、64%の生徒が「はい」、35%の生徒が「いいえ」と回答している。扇子を所有している生徒の割合が全体の85%を超え、自身で扇子を所有している割合も40%近くであるという結果となり、扇子を身近だと感じている生徒も過半数を上回る結果となった。扇子を身近だと感じていない生徒の中には、扇子を所有しておらず使用したことがないことや、団扇のほうが使用しやすいことなどを理由にあげている。想定以上に、所有している生徒が多く、身近であると感じている生徒も多い

ことが分かった。アンケート結果から、「身近に感じること」と「使用すること」には関連性があると考えられる。

次に、扇子の用途（目的）についての問いでは、扇子の用途として「扇ぐ」が最も高い値であり、次いで「伝統芸能に使用される」が高い値となった（図4）。本題材で扱う扇子は、日本発祥で、いにしえより人々の暮らしの中に定着しているものである。扇子の用途として、平安時代には、扇を水に流して、はかなく姿形を変える様を楽しんだり、戦国時代には、戦場にて鼓舞するものとして使用されたり、江戸時代には人気に拍車がかかり、庶民にとって大変身近なものになり、多くの作家が好んで扇面に表現した。扇として使われなくなると、屏風などに貼って、生活の中で大切に扱われてきている⁸。そうした扇子の幅広い用途や魅力については、理解できていないという実態が明らかになった。

本題材では、生徒にとって身近な扇子を用いて、その歴史や美術的価値、日本の文化、日本人の美意識についても鑑賞を通して学び、その学びを自己の表現に生かしていく。表現では、自身の思いを扇子に託すこ

制作するとき、自分のアイデアを考えたり、練ったりすることについてどう思いますか

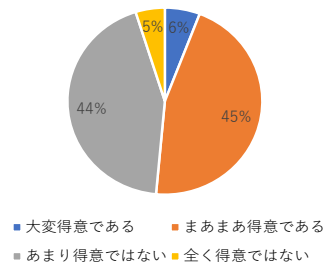


図2 発想及び構想に関する生徒の実態

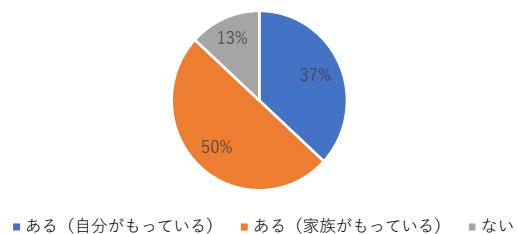


図3 扇子の所有に関する生徒の実態

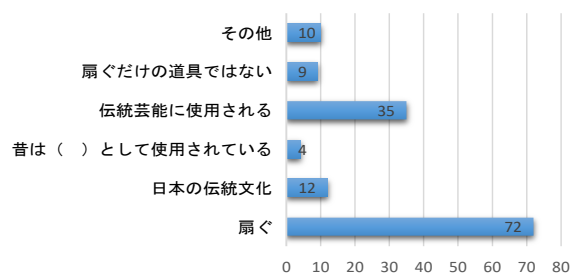


図4 扇子の用途に関する生徒の実態

とやその願いや思いを「対」で表現することを重視している。「対」の表現を通して、日本人の美意識に触れ、日本の文化についての学びを深めていく。対象生徒は、国語科においても2学期に「枕草子」を学習しているため、日本人がどのようなものを愛でたり、慈しんだりしてきたのかにも触れつつ、アイデアを練ることを重視していきたいと考えている。

(6) 指導計画及び各時の目標と内容

表1をもとに、本題材の指導計画と各時の目標と内容を設定したものが表3である。本題材は、全13時間で構成されており、第2学年の10～12月にかけて実施したものである。本題材では表現と鑑賞の活動が相互に関連づけられている。効果として、生徒の表現及び鑑賞の力が相対的に高まると考えたためである。鑑賞後に表現に取り組み、再度鑑賞を行うという構成とした。今年度は、研究2年目ということで、1年次

表3 題材の指導計画

時	<授業名>・授業内容	観点		
		知・技	思・判	主・体的
第1時	<世界美術発見！日本の美！紅梅白梅図屏風の魅力> ○紅梅白梅図屏風を鑑賞することを通して、作品が対になって描かれていることや、単純化や省略化・強調・余白の美などの造形的な要素を味わい、対に描くことの良さをつかもうとしている。 ○屏風全体の画面構成や、梅の配置、モチーフの形や色などの部分に着目して味わい、絵柄に込められた意味や制作目的などを考える活動を通して、尾形光琳が表現したかったことを感じ取る。	◎	◎	○
第2時	<世界美術発見！日本の美！芹沢銈介の魅力> ○静岡市出身の芹沢銈介と、前時に鑑賞した尾形光琳の梅の描き方を比較鑑賞することを通して、モチーフの形の単純化や省略化・強調化などの造形的な要素があることに気づく。また、扇形のフレームに再構成して描かれた絵柄の特徴をつかむ。 ○芹沢や琳派の描いた扇子などから、各モチーフの形や色などの部分に着目して味わい、絵柄に込められた意味や制作目的、用途などを考える活動を通して、いにしえの人々が相手を思いやり、創意工夫を重ねて引き継がれてきた工芸美術品の魅力を感じ取る。	◎	◎	○
第3時 第4時 (本時) 第5時 第6時 第7時	<主題をもとにアイデアスケッチを考えよう> ○自分がどんな主題をもって表現するのか、樹花鳥獣をもとにした対になるモチーフを考え、それらを組み合わせで描く。その時、形の単純化、省略化、強調、構成の美の要素、みため、余白の美などの造形的な要素をふまえる。 ○扇面制作の見通しをもち、自分の表現したい主題、モチーフの大きさや組み合わせを考えることを通してアイデアスケッチを練る。 ○日本の文様や伝統色なども紹介し、提示しておくことで、絵柄のアイデアスケッチを深めたり、配色計画を考えたりする。	◎	◎	○
第8時	<構図を考えて扇面に下絵を描こう> ○アイデアスケッチをもとに、思いを効果的に表すような構図を考えながら下絵を描く。	◎	◎	○
第9時 第10時 第11時 第12時	<彩色しよう> ○ポスターカラー・墨・和紙・筆などの材料や用具、濃淡、にじみ、かすれなど表す画面の表情によって、画材を選ぶ。画材の特性を効果的に用い、画面全体との調和を図りながら、工夫をこらし創造的に表現する。 ○日本の伝統色や自分の主題に合う色をつくり、彩色する。	◎	◎	○
第13時	<鑑賞会> ○全体や部分に着目して造形的な要素を感じ取ったり、友達と生んだ対の絵柄に込められた思いや工夫などを味わったりすることで、互いの良さを認め合う。	◎	◎	○

から2年次における学びの連続性を意識していく。特に先に述べた「地域のひと・もの・こととのつながり」、「中学校3年間で題材のつながり」、「題材内でのつながり」に注目する。

①身近な地域の美術文化を理解しようとする態度（主体的に学習に取り組む態度の育成）の育成

1年次に、A表現（1）アの題材に迫ってきたため、生徒たちは主題をもつことに抵抗がなくなり、それぞれの思いを膨らめて制作する力が身についてきた。今年度、2年生になって取り組んだデザインの題材では、形を単純化させたり、デフォルメさせたりするなど、様々なアイデアを生み出す活動において、難色を示す生徒が多く見られた。このことから、導入の第1時において、MOA美術館が所蔵する尾形光琳の《紅白梅図屏風》を鑑賞することとした。鑑賞活動では、造形的な要素を手掛かりに学びを深めていくように学習課題を設定した。対象生徒は、1年生の頃より鑑賞において、造形的な要素を手掛かりに学習を進めてきたため、既習の学びとも関連づけていった。

また、本作品には多くの「対」（具体的な描写と意匠化された表現など）が存在する。この屏風は2曲1双になっており、比較鑑賞を通して、「対」の意味や効果、表現の魅力に対する学びが深まると考えた（紅梅と白梅の描き方など）。自分なりのテーマ（「樹花鳥獣」）をもとに「対」のモチーフを考える活動を通して、新たな価値を創造する力を育んでいきたいと考えた。「対」の表現では、扇子の曲面に描くという条件があるため、モチーフの選択や組み合わせ方などの構成を必然的に考えることになる。新たな形を生み出すことは、誰にとっても難しいことだが、粘り強く制作に向き合うことで、自分なりの色や形と出会ったり、表現することの面白さが味わえたりするような授業を展開するように心掛けた。

こうした過程を通して、地域の美術文化を理解しようとする態度や主体的に学習に取り組む態度の育成の育成を目指した。

②豊かに発想し、構想する力（思考・判断・表現）と形や色彩などの造形要素に関する知識（知識・技能）の育成

第2時では、第1時の鑑賞で学んだ「対」の意味や魅力も踏まえつつ、扇子に描くことへの魅力に迫るために、引き続き鑑賞に取り組んだ。単純化・省略・強調、彩色、余白の美などの造形的な要素に着目し、扇形にモチーフをデザイン化する特徴をつかませるために、静岡出身の芹沢銈介と前時で鑑賞した尾形光琳の梅の描き方に着目した比較鑑賞にも取り組んだ（図5）。扇子の絵柄に関しては、「のぞき・すま・みため」の3つの魅力⁹を紹介し、今後のアイデアスケッ

ちに生かせるようにした。

鑑賞後の表現活動（第3～7時）では、主題を生み出すことや主題を作品化（色や形の工夫など）するためのアイデアスケッチに取り組んだ。特に、知識及び技能面では、形を単純化させたり、デフォルメさせたりすることに課題のある生徒が多いため、アイデアスケッチの段階で、前時の比較鑑賞を振り返るように指導支援を行った。アイデアの深まりが、本題材での生徒の達成感や満足感へと繋がると考えることから、その時間を十分に保証することも心掛けた。与えられたテーマ（「樹花鳥獣」や「対」）の中で、主題を生み出しアイデアスケッチを追究する力やデザインの過程で形を単純化・省略化・強調化したり、構成の美の要素、扇子の3つの魅力なども踏まえたりして、新たな価値を創造する力を育むことを目指した。

また、制作では金色をベースとした用紙に描画するという工夫を行った。金色の紙に描く経験は今までに無く、生徒の意欲を喚起すると考えた。彩色活動では、筆で描くだけでなく、竹串や爪楊枝、スポンジなどの描画材料、また既習してきたモダンテクニックなども応用することで表現の幅が広がることも紹介し制作に生かせるように指導を行った（図6）。

こうした過程を通して、豊かに発想し、構想する力（思考・判断・表現）と形や色彩などの造形要素に関する知識（知識・技能）の育成を目指した。

③制作過程の試行錯誤を大切にし、よりよいものを追究しようとする態度（主体的に学習に取り組む態度）の育成

第8～12時は、扇面（対）の下描きと彩色の時間にあてた¹⁰。彩色計画にあたり、1年次に学んだ日本の伝統色について改めて紹介した。移ろいゆく四季の中で美の心が生み出された伝統色は、古来より暮らしの中に多彩な色合いを取り入れ、繊細な色の世界を織りなしてきた。生徒たちが制作する際には、それぞれの主題に合わせて色を検討し、扇面に彩色する際には、自分なりの色づくりができるように指導を行った。

第13時には、制作した作品鑑賞の時間を設けた。これまで学んだ視点（発想、構想、知識、技能など）

から鑑賞に取り組んだ（図7）。授業後には、校内に展示するなど、生徒の学びを共有できる機会を設けるようにした。また、12月に作品が完成したことから、新年を迎えるにあたって家に作品を飾り、家族と鑑賞することを提案した。創造した作品が自分の生活を彩り豊かにしてくれることを認識するきっかけになると考えた。鑑賞では、ワークシートを効果的に用いて、自分の思いや制作の工夫を具体的に言語化し、他者と意見共有を行うように指導支援を行った。ワークシートは鑑賞時のみならず、制作時にも使用した。制作時には、各自のつまずき、思考の変容、表現における試行錯誤などが把握できるような記述欄を設け、自己評価が行えるように工夫した。

こうした過程や方法を通して、制作過程における試行錯誤を大切にし、よりよいものを追究しようとする態度の育成を目指した。

5. 成果と課題

本実践の成果と課題について考察をおこなう。昨年からの引き継ぎ、生徒AとB（以下、AとBと記す）について分析を行い、その後、全体に実施した事後アンケート¹¹について分析を行う。AとBは、入学時から美術に対して苦手意識を持っている生徒であり、1年次より継続観察している。

（1）Aの変容

Aは、思いがあってもアイデアを形に表すことが難しく、表現する手が止まってしまうことがよく見られる。美術科で育成すべき資質・能力の内、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」について、特に重点的に指導支援を要すると考えてきた。

Aは、自信がないためか表現での作品も小さめで主体的に活動に取り組む姿はあまりみられない。ただし、1年次の題材を通して、表現において主題を自ら決定し、試行錯誤する姿が徐々に見られるようになってきた。前報⁴では、Aは主題を深め（思考・判断・表現）表現への意欲が高まっていることが考察されたが、一方で、主題をもとに制作する過程（知識や技能など）で苦戦したため、思うような作品に仕上がらな



図5 比較鑑賞時の発表の様子



図6 描画材料を工夫し制作する様子



図7 生徒作品
「人々の心を動かす扇」

かった悔しさが残った。

本題材の作品のアイデア段階では、しばらく悩んでいた。しかし、日本ならではの四季の魅力や「樹花鳥獣」をモチーフとする魅力や「対」を意識しながら、主題を検討していった。主題を検討する過程では、前年度同様に、個別指導を重視してAの思いに寄り添うようにした。その指導の中で、自宅近くにある田んぼが季節によって表情を変えていくことや、カエルの鳴き声が季節で異なることを発言する姿がみられた。視覚や聴覚を通して、テーマや対象を捉えており、そうしたAの捉え方を価値づけるようにした。その価値づけが、Aの自信となり、田んぼとカエルをモチーフにしたいという思いが芽生えた。次時には、自らカエルが掲載されている図鑑を持参し、アイデアスケッチを進めるという積極的な姿が見られた。Aが自ら資料を持参したということは、本題材（制作）への意欲が生まれたことを示唆しているものである。最終的に、主題を「季節によって移り変わる田んぼの様子を人々に感じさせる扇」と決定した。「季節の移り変わり」を「春（カエルと苗）」、「秋（成長した稲）」の「対」で表そうと考えた。アイデアスケッチの段階では、「春」の扇面には冬眠から目覚めたカエル（一匹）の様子を表現することは決定していたが、「秋」の扇面のアイデアについては悩んでいた。机間指導の際にも、試行錯誤している様子は見られるものの、実際に形にすることはなかった。図鑑を持参したり、主題を決定したりしたもの、アイデアスケッチに取り組む段階では、モチーフ（カエル）の描き方に悩んでいた。そこで、教員がカエルの描き方が掲載されている冊子を具体的に提示し、指導支援を行った。1年次にも、同じ制作段階で課題を感じていたため、描き方の指導においては、口頭での抽象的な指導ではなく、視覚的に且つ具体的な手本の提示を行うようにした。その後、冊子を参考にしながら、自分の表現したい形を試行錯誤すると共に、目標を定めて制作に取り組めるようになった。構図（「秋」の扇面）の検討では、コピーを活用して構図を検討する方法を紹介し、図8のように同じ形（カエル）を繰り返す効果などを共に確認した。

Aの事後アンケートや作品の解説からは、日本の美の造形的な要素を取り入れ、カエルや波紋を連続させ一部扇面からはみ出させたり、余分なものを一切描かず（切り捨ての美）余白を生み出したりするなどの工夫が分析できた。単純化、省略化を意識した制作活動では、「春」の扇面では稲の苗や穂をあえて1本だけにし、余分なものを描かなかったと述べている。事後アンケートでは、「単純化・省略化が上手くいったこと」、「対のモチーフの組み合わせが良かったから」と回答しており、制作が満足のいくものであったことが示された。事後アンケートの回答からは、制作にお



図8 Aのアイデアスケッチ（構図の支援）
カエルの構図やサイズに困っていたため、教員がコピーを配置して検討する方法を提案した。その手立てをもとにAは構図を練ることができた。

ける技能面の課題が、1年次の頃より、改善されている様子がうかがえる。技能面では、前述したようにモチーフ（カエル）の形を描くことに苦戦したため、コピーや資料などを活用した。主題を生み出すことと共に、技能面の課題を乗り越えていくには、表現方法の極め細やかな指導支援の充実が重要であるといえる。さらに、発想に関しては以前よりもその幅が広がったと回答した。影響した手立てとして、「友達との対話」と「教員からのアドバイス」をあげていることから、アイデアの段階でのAとの対話や制作の価値づけが、Aの思考を深めたり、表現への意欲を高めたりしたと考えられる。本題材では、主題を生み出すことに加え、主題をもとにアイデアを練る段階でも成長が見られた。

（2）Bの変容

Bは、アイデアがなかなか生まれず、構想を練る活動では苦戦し、毎回活動が遅くなってしまう傾向がある。BもAと同様に、美術科で育成すべき資質・能力の内、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」について、特に重点的に指導支援を要すると考えてきた。1年次の題材では、最後まで投げ出すことなく諦めずに表現に取り組むことができた。また、題材での学びを次の題材で生かす姿や制作を追求する



図9 導入時の鑑賞活動をおこなうBの様子

姿勢もみられた。表現方法（グラデーション）の充実が満足感につながっていたが、アイデアスケッチの難しさを指摘する姿も確認された。

本題材では、Bは、導入での鑑賞を通して、日本では古来から自然をモチーフにした作風が多いことに気づき、自然の雄大さと素朴さの共存を表現していこうと考えた（図9）。主題は「人々に自然の美しさと優しさを伝える扇」と設定した。主題に関しては、1年次と比較して、制作の早い段階でイメージを持ち、積極的に取り組むことができた。その背景には、アイデアを考える際、スケッチだけではなく言葉を用いても良いとしたことが影響したと考えられる。さらに、発想や構想に関して教員が指導を行ったり、教員や友達との対話活動を通して自分の作品（主題や表現方法の関連性など）に向き合う時間を設定したりしたことがあげられる。Bにとって、主題と表現方法を関連づけることは難しかったが、表現の可能性を感じていった。こうした過程を経て、主題を表す「対」のモチーフとして、「桜」や「紅葉」を選択した。描きたいモチーフの画面への構成や造形的な要素（単純化や連続性の美、余白の美）を意識しつつ、時間をかけてアイデアを練り、その後、アイデアスケッチに取り組んだ。個別指導や教員や友達との対話をきっかけに自身のアイデアを広げていった。こうしたBの積極的な学びの姿勢は、上記の指導に加え、鑑賞と表現を相互に関連づけた題材構想も影響していると考えられる。描くこと（表現方法）やアイデアを考えることに苦手意識を感じる傾向にあったBにとって、表現活動から学びを深めていくのではなく、導入時の鑑賞を通して、日本の美術作品の構図の面白さや造形的な要素に気づいた上で、それを表現に生かせる学びの構造が制作への意欲を高めたといえる。

制作過程では、鑑賞を通して学んだモチーフの大きさや組み合わせについて時間をかけて検討していった。事後アンケートでは、主題を明確にしてテーマを設定できたことや制作において鑑賞で学んだ造形的な要素（単純化や省略化など）を意識して表現できたことなどを振り返っていた。

Bは、授業後に完成作品（図10）を家庭に持ち帰り鑑賞する際には、玄関に飾って鑑賞することにした。家族が最も行き来する玄関に飾ることで、家族や来訪者に作品を通して自然の美しさと優しさを伝えようと考えたからだ。家族と自分の評価は、図11の通りである。家庭に作品を飾ることで、生活や年中行事と関連づけて形や色彩、材料、光などの性質やそれらが感情にもたらす効果や自身の作品の魅力を捉えている様子がうかがえる。創造した作品が自分の生活を彩り豊かにしてくれることを認識するきっかけになったといえる。Bにとって家族からの肯定的な評価が、今後の表現への意欲向上にもつながると考えられる。



図10 Bの作品「人々に自然の美しさと優しさを伝える扇」

家族の評価	扇の色自体も金と青（昼と夜）の対になる様によく工夫できていると思います。玄関を入ってすぐ目の前に飾っていただけで、本人の感想にもあるように良く目に付くベストな場所でお正月らしさを感じることができる大変すばらしい扇に仕上がっていると思います。
自己の評価	玄関に飾ることで、外から家に帰ってきた際に必ず目に入る所となり、扇の金がすぐに目に付くような感じになりました。玄関には、手前にある正月っぽい飾りもあって、より正月の豪華さが体現されている所になってしまいました。また、扇の他にも正月ということで、昔ながらの日本の文化に触れられる機会としても扇が活躍したと思います。とにかく、扇を飾ってみたら、思いの外目に付き、正月感を演出してくれる様な存在になりました。そして、扇をながめるたびに気持ちが落ち着き、しんみりした気分になりました。

図11 家族での作品鑑賞の評価（家族及び自己）

（3）他生徒の実態

生徒全体の傾向として、1年次の題材を通して、思いをもち表現活動に意欲的に取り組めるようになってきた。前報⁴では、主題を意識して制作ができるようになった生徒の姿を報告している。さらに、各題材での学びを次の題材で生かす姿や制作を追求する姿勢もみられるようになった。一方で、AとBと同様に表現の技能面に課題を感じている生徒が多かった。構想を練る活動で手が止まってしまう生徒がいたり、自分には画力がないため難しいと言ってアイデアを深められなかったりする生徒もいた。美術科で育成すべき資質・能力の内、「知識・技能」の特に技能や、「思考・判断・表現」の構想について、2年次では重点的に指導支援を要すると考えた。

事後アンケートでは、83%の生徒が扇の制作について大満足・満足、6%の生徒がやや不満・不満足と回答した。満足の理由としては、「単純化・省略化が上手いかったから」（44人）が最も多く、次いで前年度の課題であった「彩色が上手いかった」「構成が上手いかった」（各39人）、「友達の作品を鑑賞することが自分の学びになった」（38人）となっている（図12）。また、表現方法（単純化・省略化）に関しては、92%の生徒が意識できたと答えている。更に約7割の生徒が、「新たな対を構想することが、自分の発想の幅を広げることに繋がった」と答えている。一方で、制作が「やや不満、不満足であった」理由と

しては、「彩色が思い通りにいかなかったこと」(27人)、次いで「単純化・省略化の難しさ、構成の難しさ」(24人)などとなっており、表現の技能面に関する理由をあげる生徒が多かった(図13)。

事後アンケートの「主題を常にイメージできたか」の問いに対して、91%の生徒が意識できたと回答していることから、1年次から継続して意識した主題を生み出す活動の成果が出ており、生徒が思いを豊かに表現しようとする活動に効果をもたらしたと考えられる。また、表現の知識や技能面の資質・能力の向上や課題が制作の満足度に直結している結果となった。主題づくりと同時に表現における知識や技能面の資質・能力の必要性については、前報⁴においても指摘したが、本結果をみてもその資質・能力のバランスが重要であることがわかる。

本題材で自分の発想を広げることができたかを問う質問では、99%の生徒ができたと回答している。その手立てとして、「友達との対話」(60人)、「教員からのアドバイス」(51人)、「友達との作品鑑賞」(37人)、「作家作品の鑑賞」(36人)と続いた(図14)。教員の個別指導や教員や友達との対話をきっかけに自身のアイデアを広げたという本結果は、AとBと同様の傾向を示した。なお、実践を行った美術室は対面式の座席となっており、必然的に対話が生まれやすい形態になっている。こうした対話が生まれる環境づくりが、重要であるといえる。

6. おわりに

前年度から継続して2019年度も生徒たちの実態を踏まえ、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点から育てたい資質・能力を明確にした。また、本題材では「地域のひと・もの・こととのつながり」と「中学3年間の学びのつながり」、「題材内での学びのつながり」の3つの「つながり」の視点を意図的に組み込んできた。2019年度は、2018年度の2つの「つながり」の視点に加え、「題材内の学びのつながり(表現と鑑賞を相互に関連づけること)」を加えて重視した。表現と鑑賞の学びを意識的に相互に関連づけることで、生徒の表現への意欲が高まり、1年次に課題としてあげられていた表現における知識や技能面の資質・能力の育成につながる結果となった。事後アンケートでも表現と鑑賞の学びの連続性に関する記述がみられた。例えば、「日本の美とは何かと考え、周りの自然と関連させて表現することができた」「授業で鑑賞した《紅白梅図屏風》から、紅白の対比や、遠近法、視点の工夫、余白の美などの工夫を生かして創作できました。自分の作品にも、金を生かした余白をつくったり、鳥と花との対比をしたりと生かしました」「私は、シンプルなものより、細かいもののほうがいいと思っていました。この学習を通して、単純化されたものの良さ

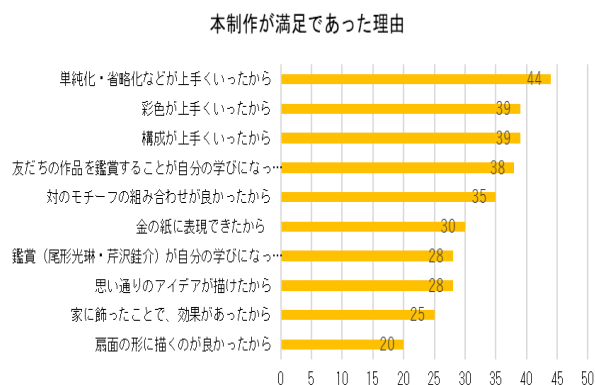


図12 本制作が満足だと感じた理由

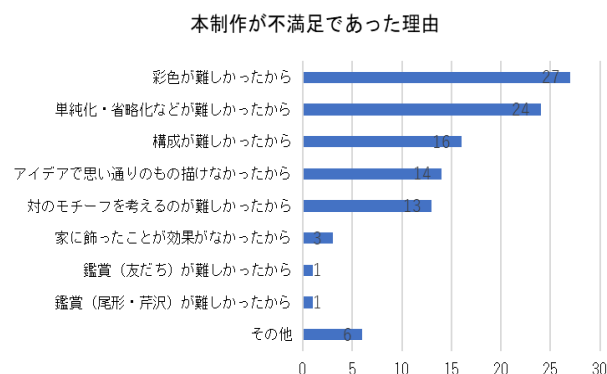


図13 本制作が不満足だと感じた理由

発想が広がることに影響した手立てはなんですか

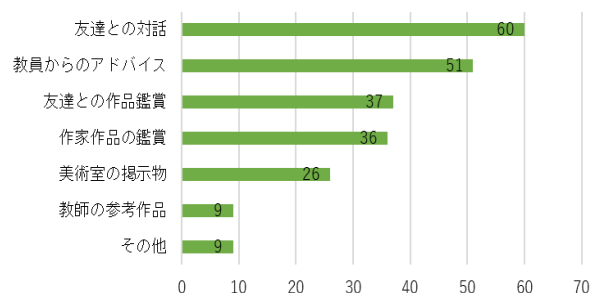


図14 本題材の思考・判断・表現に関する手立て

がわかり、それらを意識してやることができました」「光琳や芹沢作品を鑑賞することで、梅と言っても、様々な表現方法があったため、作品にも自分らしい単純化・省略化をするように意識できた。図形を使って表現するなど工夫できた」などである。1年次からの「つながり」を重視すると共に、表現と鑑賞を相互に関連させる学習を通して、効果的に生徒の見方や感じ方を深めていくことができたといえる。

さらに、2018年度と同様に、個人指導の重要性や対話の重要性が考察された。教員の指導支援については、改善する必要がある。生徒の思いを汲み取り、思いが形になっていく過程で、どんな声かけや支援ができるか再検討していきたい。また、今年度の研究を通

して、生徒の発想に大きく影響していた手立てとして、友達との対話（ペアや小集団）があげられた。

「対話すること」が目的になるのではなく、対話する目的を明確にしつつ、適切なタイミングで制作段階に位置づけなければならない。今後は、生徒の実態に応じ、効果的な友達との対話を設定していきたい。

2年間の実践を通して、表現や鑑賞の過程において、一生懸命に試行錯誤した過程や新たに創造したものの・ことを生徒自身が認められるようになる指導支援も必要だと感じる。本題材では、授業内での作品鑑賞だけではなく、家庭での作品鑑賞にも新たに取り組んだ。美術作品と生活を関連づけて捉えることや作品の展示場所を検討し家族と鑑賞する一連の過程を通して、生活を豊かにする美術の役割を感じてほしかった。今後も、「つながり」を意識した題材開発の可能性を検討すると共に、家庭や地域と連携した授業外での作品鑑賞などの可能性も検討していきたい。

註

¹ 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 美術編」日本文教出版、2018

² 道越洋美、高橋智子「大学や地域との連携を通じた授業実践の取り組み：附属島田中学校美術科における教材研究の工夫」静岡大学教育実践総合センター紀要21、pp.187-200、2013

³ 加茂千景、高橋智子「作家と連携した鑑賞授業の取り組み：静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究」静岡大学教育実践総合センター紀要24、pp.133-143、2015

⁴ 田丸光恵、高橋智子「遠州横須賀凧を生かした美術科の題材開発：静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究」静岡大学教育実践総合センター紀要30、pp.262-271、2020

⁵ 対象は第2学年であり、男子50名、女子58名の合計108名であった。

⁶ 鑑賞作品には、MOA美術館所蔵の《紅白梅図屏風》や静岡市出身の芹沢銈介の作品を用いた。

⁷ 事前アンケートでは、以下の問いを設定した。「制作するとき、自分のアイデアを考えたり、練ったりすることについてどう思いますか」「あなたの家に扇子はありますか」「扇子はどんな時に使いますか」「知っている扇子の用途は何ですか」「あなたが1年半の学びでついた美術の力はなんですか」など。

⁸ サントリー美術館、山口県立美術館編集『扇の国、日本』（展覧会図録）、サントリー美術館発行、2018

⁹ 小林泰三『誤解だらけ日本美術 デジタル復元が解き明かす「わびさび」』光文社、2015

¹⁰ 第8時に下絵を行い、第9～12時に彩色を行った。

¹¹ 事後アンケートでは、以下の問いを設定した。「樹花鳥獣の世界の制作はどうでしたか」「扇子に対

してイメージは変わりましたか」「自分の主題をイメージできましたか」「自分なりの対を考えたり、練ったりしたことは、自分の発想の幅を広げていくことにつながりましたか」「発想の幅が広がった手立ては何ですか」「日本の美の鑑賞から、単純化・省略化などを意識して制作できましたか」など。